

# 路上生活者の個人史

## 第5回

竹中尚文

今回、聞き取りに応じてくれたのはタナカ氏(仮名)である。タナカ氏は初めて見る顔だった。私がタナカ氏の顔を覚えていなかったのではなく、彼は初めてここに来たのだった。ここに来ると稲荷寿司や生活必需品がもらえると聞いて来たそう。ホームレスの多くの人たちは、支援者の様子を窺っている。何回も顔を合わせる内に少しずつ言葉を交わすようになる。タナカ氏の場合は異例だった。いきなりインタビューに応じた。そして、自分の匿名性をどうやって保つかを納得して、インタビューを受けてくれた。一ヶ月後の食糧支援には来なかった。他のホームレスの人によれば、数日後に他の支援団体によってホテルに短期間滞在させてもらってから、就職の支援をうけたらしい。彼が淀川の橋の下で寝たのは数日だという。短い方がいいに決まっている。私も話を聞きながら、そんなに長くここにはいないだろうという気がしていた。

タナカ氏(仮名)1992年生まれ。

大阪の中之島で生まれました。もうすぐ30歳です。19歳で大学に入るまで大阪の中之島ですごしました。そうですね、大学は一浪して入学したので、19歳まで実家で育ちました。大学は、九州大学の医学部です。そうですね夢をもって、勉強をしました。

夢ですか？ 命あるものに興味がありました。命は人間だけでなく、動物にも命があります。それを区別して細分化することで、命を見ていな

いように感じていました。人だけとか、特定の病気だけを診ることでそこにある命の存在を忘れてるように見えました。自分はそこにある命を診ていきたいと思っていました。中学生の頃、祖父母が牧場をしていました。そこで、動物に病気が発生して全頭処分になりました。家畜の命はいともたやすく「処分」されるのです。そのことがとても悲しく悔しかったです。

大学は卒業していません。4回生の

時に挫折をして、大学を辞めてしまいました。中退した理由は、「金と酒と女」です。僕はダメな人間だったのです。僕は小学校の頃から、みんなが外で遊ぶというときに教室に一人残っている子どもでした。みんなが何かをするときに、自分だけは一人で閉じこもっているような子どもでした。そんな少年のまま、大学生になってしまいました。そんな自分に嫌気がさして、はじめてみたら身を持ち崩してしまいました。解剖の時の「臭い」はずっと鼻の奥に残っているのです。えっ？女？ ずいぶんと入れ込みました。そして「別れ」もひどかった。ずっと立ち直れなかったですよ。そんな時にちょうどよかったのが酒です。お酒に入れ込んで、気が付いたらお金で身動きできないようになっていました。

学生ではどうにもならない額の借金を作ってしまったので、大学を辞めて実家に帰りました。働いて借金返済をしました。どんな仕事かって、言えないような仕事でした。3年ほど過ぎた頃に、警察のやっかい

になりました。裁判官に諭されて、二度とこの世界に戻らないと決心をしました。

実家に帰ったら、鍵が変わっていました。あれ？と思って、電話をしたら番号が変わっていました。ウチは母親と二人だったのです。私は母親に捨てられたと思いました。

ウチは母子家庭といいながらも、密な親子関係を感じてはいませんでした。子どもの頃に何かを買ってほしいとせがむと、買ってはくれるのです。買ってから「これはおまえに対する投資だから、いつかちゃんと返せよ」といいました。塾や他の衣類なんかもそうでした。小学校から帰ってくると、千円札が置いてあるのです。それを握って、コンビニに行くのが日課でした。中学生になると、母親が彼氏を作っているのを見るのです。ウチから飲み屋街が近いのであちこちの飲み屋に行きました。「母親を迎えに来ました」といって、あちこち馴染みの店を回りました。僕も同じですが、母親は酒癖が悪いのですよ。そして、大学入試に失敗して浪人をし

たときに、母親に言われました。

「おまえは失敗作だから、大学卒業までは面倒を見てやる。それ以後は、おまえにかかった費用をしっかりと返済しろ。それ以上の関係はないものと思え」

と。

家族に対する思いですか？それは、ありましたね。自分が父親になったら、絶対に一人親にさせないと思いました。何かあっても、陰の部分を負いながら何とか生きていくという家族観が理想でした。でもね、大学の頃に読んだもので、不幸な家族で育った人間は幸せな家族をつくれる確率が低いと知りました。その時、自分は親父になれないのだなと思いました。親父になってはいけないと思いました。

20代前半はいろんなことがありましたけど、自分の人生をリセットしなければならないなと思うようになりました。そんな思いがわいてきた頃に、友だちが声をかけてくれたのです。料理店を始めるからといって、住む所もあるというのでそこで働く

ことにしました。寮に入って2日目にその友だちが消えました。住まいを追い出されて、千円あまりしかありませんでした。川西だったのですが、もっと都心に行かないと何ともならないと思って歩いてきました。とりあえず、その先の淀川大橋の下で腰をおろして、ここの炊き出しを聞きました。

【記録者】彼は再び支援の場に来ることはなかった。改めて考えてみると、人間が生活する上で必要な要素と考えられているのが「衣食住」である。この「住」を失った状態をホームレスというのであって、同時に「衣」も「食」も厳しい状態になる。最近のウクライナの状態をみても、本人の意図とは無関係に「衣食住」を失う。ホームレスの状態を自己責任と言い放つ人の傲慢さを認識したい。